

## 西アジアに生きた詩人

鈴木道子

みな  
水

わ  
泡<sup>(1)</sup>

わたしの知っていた人が大勢  
一瞬の風の如く去って行った。  
今も尚、多くの人が  
    過ぎ去ろうとしている、水泡の如く。  
クシャーールよ、お前もこれと同じだ。  
造物の神はきっと  
今度はどの水泡を吹き飛ばすのか  
    よく知っているのだ。  
水泡は飛ばされるが早いか流され  
そして忽ち消えてしまう。  
水泡は脹もうとするや、弾け  
最早繕う術もない。だが  
消えゆく前に、いかに踊らされることか  
実体も無く、足場も無く  
周囲の冷たい風に会って  
上へ下へと踊る。  
悲しみと喜び、歓喜と悲哀  
明日には入れ代ろう。  
汝自身を知れだって？ 馬鹿げた説教だ  
水泡には内省の心など持てはしない。

これは Pashto 語で書かれた Khushhal Khan Khatak (1613—1689) の

詩の英訳からの重訳である。パシュト語は Pathan 族の言語であり、パタン族はアフガン族ともいわれる。言うまでもなくアフガニスタンを構成する最大の種族であり、西パキスタンにあっては北部に住む少数民族種族である。名前にある Khatak はパタン族中の一部族の名称だ。クシャールの曾祖父はムガル帝国の基礎を築いたアクバル帝の時カタック族の長に任命され、現在の西パキスタン北部の都市ペシャワール付近の警備を任された。以来その地位は代々受け継がれてクシャールの息子にまで至る。

クシャールが父の跡を継いだのは1641年、28歳の時である。時のムガル皇帝シャー・ジャハンのために、カイバル峠を越えて現在のアフガン北部の地へ幾度か遠征し、功成り名を遂げて帝の寵愛を享受した。ところが1658年帝位継承争いが起り、それにパタン族内の部族争いが絡んでクシャールは失脚した。1645年51歳の時から5年間幽閉の人となる。その後事情が変わり、かって彼に好意を寄せていたムガールの指揮官により解放されて再び旧地の平定を依頼された。カイバル峠付近一帯で各地の部族軍がムガル帝に対する抵抗戦を開始し、官軍は痛手を受けていたからだ。だがクシャールのムガル帝への忠節心は完全に冷えていた。自ら抵抗戦の指揮を取り、いくつかの記録に残る大勝を納めた。ムガル帝側についた自分の息子とも闘いながら、彼は同盟者を求めて旅を重ね、それは時として空しく危険な旅だったけれど、1689年76歳で死ぬまで、反逆者でありかつ自由人であり続けた。

カタックの英雄クシャールを称える歌は今も人々に歌われ、彼の作った詩の文句も親しまれているという。彼が生涯にわたっていくつ位詩作したのか分らないが、今回私が重訳した詩集には長短とりまぜて25の詩がは入っている。若々しい恋愛詩、美しい季節をうたった詩も多い。これらは若い頃の作品と考えられるが、内容が重濃になってくるのは幽閉されてからだ。齢既に50を越しているが、この間に傑作が多い。解放されてからの彼は、正に剣とペンの二刀流使いだった。その二刀を駆使して助長した部族の抵抗戦は、インドにおけるムガル帝国の崩壊に少なからぬ影響を及ぼし、ひいては大英帝国の東インド会社に始まるインド支配を容易にすることになった。

しかし、そうした歴史の因果もさることながら、やはり興味をひかれるのは詩人の矛盾を孕み溢れ出るような感情の流出である。

運 命 (2)

奮闘したところで何の甲斐があろう  
 思案したところで何の益があろう  
 運命が勝手気儘に動かすものを。

戦列成して立ち向かおうと  
 世界中が一つの刃<sup>やいば</sup>となって  
 わたしに死を迫ろうと、

鉄砲の玉に矢、刀使いに槍使い  
 気に留められず恐れられもせず  
 人はすべて無力なもの、

運命の判決が下されるまで。ここに蜜蜂、  
 略奪者、腹一杯吸い取るために  
 花から花へと飛び回る。

クシャルよ、運命もこれと同じだ  
 目下調子は上々で、世界中は  
 お前の勇気と技を称えて沸き立っている。

だがお前は歌や話の中で生きたいのか？  
 青春は誉れある行いを成す時  
 若者は情熱的、老人は意気地無し。

お前の先祖達は皆槍を尖らせた  
 お前の先祖達は皆剣を取った  
 彼等に続け、何も恐れずに。

バタン族が西アジアの歴史に登場するのは比較的新しく13, 14世紀のことであり、その成立の詳細は不明だがトルコ系とイラン系の混血といわれる。ムガル帝国（1526—1858）との関係は、インドの諸部族の場合と同様、征服者被征服者の関係である。ムガル帝国はインド最大の外来イスラム国家であったから、クシャーールの教養もコーランの勉強によるアラビア語から得られたものと考えられる。宮廷で面目を保つためには、征服者のもたらした種々なペルシヤ語文化にも通じていなければならなかったであろう。

しかし、所詮彼は被征服種族の長にすぎない。一旦帝の寵を失えば長は他の部族の者にとって代えられる。しかも政教一体であったイスラム世界にあっては、それは常にイスラムの絶対神の名の下に行われる。彼自身その名目を掲げ、日の出の勢いで次々に遠征を企てたこともあった。従って、情勢が変り彼が反逆者になったところで、事情を詳らかに知ることのできない私達がその行動の是非を問題にしても意味がない。が少なくとも彼は、イスラム教国王の本質の一側面を捉えていたことは次の詩から察せられる。

### アウラング——嫌悪の歌 (3)

アウラング、奴のことはよく知っている。  
 厳正にして、儀式を遵守し祈りは八張面。  
 だが奴は同胞争いで兄弟を殺し  
 父親に挑んで一生牢に閉じこめた。  
 この教徒、千度大地に頭突こうと  
 度重なる断食が背中と腹をひっつけようと  
 行いが言葉に伴って善を意図しないなら  
 そんな態度は無益、断食は単なるみせかけ  
 蛇の外見は美しく、皮はピカピカだが  
 唇の奥に毒舌が潜み、裏切りが構えている。  
 勇者は言葉語らず、行動で人の賞揚を得、  
 臆病者と法螺吹きは口先で戦闘を交える。

私の言葉は読む者にアウラングの姿を見せる。

私の手は彼にまで届かない

だが神よ、聞いてくれ、お願いだ。

神よ、最期の審判の日、アウラングに

決して慈悲などおかけになるな。

(アウラング=アウランゼブ、ムガール第六代皇帝)

この『王らしからざる王、信頼がおけず、虚偽と偽証に固められ／彼の真実  
は偽り、彼の忠節は嘲り／奴と我等との間に公正な契約はなく／ムガールが立  
てば我等は使われ、そして死ぬ<sup>(4)</sup>』だけの帝に反旗を翻し、クシャルは部族  
に連合を呼びかけた。『だが我等は連合し進軍せねばならぬ／モモンド族、ス  
ンワリ族、そして誇り高きアフリディ族よ／時は来た、今こそ立ちて男を見せ  
よ。／剣のみが解放を与え、剣のみが我等の優位を示すのだ<sup>(5)</sup>』

だが呼びかけは応々にして空しい。

私は戦いを呼びかける、だが

誰がそれに注意を払うものか。

私は戦闘への呼びかけに疲れた

誰も耳を傾けず、従ってもくれないなら

死よ、来い、歓迎してやる

早く来い、優しき死よ

誉れなき生など呼吸の浪費というもの

生きても死んでも誉れを我が導きとすれば

クシャルは人の記憶に留まろう。<sup>(6)</sup>

抵抗戦の指揮者の地位を退いてからも、彼は自身を反逆者、out law と名乗った。『おお神よ、栄誉を与えよ、連合を、そして大いなる返し歌を／さすれば老クシャルも立ちて再び若者とならむ』<sup>(7)</sup> と叫び、日々精力的に動き回った。だがその現実とは裏腹に、底無しの虚無感が彼の内部で拡がってゆく。これはむしろ当然なことではあるが、勇猛なることを誇るパタン族<sup>(8)</sup>の、

しかも反乱軍の大將が虚しさを赤裸にうたったところはおもしろい。その上そこには、いかにも行動人らしい虚しきの受止め方が示されているのである。

冒頭に紹介した詩「水泡」の末2行、『汝自身を知れだって？ 馬鹿げた説教だ／水泡には内省の心など持てはしない』という言葉からは、死ぬまでとも角踊り続けるのだという一種悲愴な覚悟が窺える。二番目に紹介した詩「運命」においては、末6・7連とその前の連に少々矛盾があるが、運命に逆うではなくできるだけのことはしよう、名誉だけは汚さずに、という楽天的な行動家の一面が表われている。

とは言っても虚無感<sup>⑨</sup>は神を冒瀆するに等しい。当時の被征服部族にとってイスラム教は宗教としておのおのの精神生活にどのような拘束力を持っていたのかよく分らない。しかしクシャールの場合、彼の神に対する接し方考え方は私に全く異和感を抱かせない。例えば 'Is it not?' 「そうじゃありませんか？」と題された詩の中に次のような連<sup>⑨</sup>がある。

「神よ、私の訴えをお聞き下さい——  
あなたは私に目を下さいました。それは  
何のためです、見るためじゃありませんか  
そうじゃありませんか？」

僧さんなら断食をしてお祈りするでしょう  
ただそれはわたしの道じゃない  
わたしには別の道がある  
そうじゃありませんか？」

わたしには別のやり方がある——満々たる  
生命<sup>いのち</sup>の盃、溢れる酒をいただく  
いいじゃありませんか？」

これは若い頃の作品かも知れない。目があるのは美人を見るため花を愛でるため、酒があるのは味わうため、それらを作ったのは神様じゃありませんか、

と言うつもりだろう。『わたしの道』という言葉は、運命に翻弄されながらも運命をどこかで支配しようとするクジャールのクジャールたる意気を見せていると同時に、征服者の宗教に対抗する意識をのぞかせているとも考えられる。(こうした言葉自体を捉えての解釈は原詩を根拠にしていなため問題があるが、それについては後ほど考えてみたい)

しかしこれが彼の宗教感のすべてだと思っでは間違いで、神を称える歌‘Laus Deo’とか‘The King’とか‘A Psalm’などもある。‘A Psalm’の後半<sup>(10)</sup>を紹介しよう。

礼拝の時、私はあなたを称えますが、心の中では何の酬いも求めませんし、何の益ももたらしてくれません。そうです、私には、あなたに相応しい讃辞を捧げる力がないのです。

神よ、私を血の犯罪から解放して下さい。今も私は刀に手をかけ、罪も無き人を墓場へと追いやっています。

誠、私の欲望は善なるものを悪に変え、悪を善に変えている。私はいえ、命令のもとではいつも全く無力なのです。

私の魂はあらゆる不信を喜んでいます、72歳の今でさえ。しかし、それでも外見から私は忠義者の一人に数えられているのです。

神よ、私は欲望の大海に身を投げています、欲望の磐に囲まれています。

闇雲に祈りを繰返すのがムスリムならば、確かに私もそうです、私だって誠の信者の一人です。

私にはあなたの叱責に耐える力がありません、おお神よ、お慈悲を私にお注ぎ下さい。あなたの門口で私はお待ちしています。

私は罪と虚栄の魂だけれど、それでも私はクジャール、全能の神の下僕です！

詩中の言葉から創作年代が明らかになる。しかし、自分を陥れた新しい帝アウラングを罵倒する詩を書いた時から、彼における信仰の本質は変わっていない。行動において名誉を重んじる心は、神に対してはただ虚心であることだけを求めた。だが行動家であり続けることと虚心であることは矛盾する。行動は目的が何であれ、効果を狙い、効果に対する欲望を起こさせる。彼はそれをよく知っていた。にも拘らず最期まで行動家であることが止められず、それ故にこそ、神の許しを求める心は一層強烈だったものと想像される。『それでも私はクシャー爾、全能の神の下僕です』と全身を投げ出しながらも、全体の調子はいかにも苦しい。悪戦苦闘したけれどなんともならなかった人生、なんの益も無く、ただ無駄な血を流したことだけが記憶に残る人生（この齢まで生き長らえたのだから、随分と大勢の人を殺したに違いない）、そのやりきれなさがひしひしと伝わってくる。それを単に後悔の念、と断定することは危険だろう。彼は人から見れば『忠義者』であり、彼の友人で彼が罪を犯したと思う人はいないのだ。<sup>(11)</sup> 苦痛の根はむしろそこにあり、それを根底から告発しそのことによって彼を救えるものは神しかいない。そしてそれは同時に彼自身の役割でもある。真に行動した人間が果たさなければならない最期の清算なのである。

さて、クシャー爾の訳詩集の中に、訳者によって‘Carpe Diem’と題された詩がある。

### Carpe Diem <sup>(12)</sup>

薔薇の花、そして酒、苦楽を分つ友  
 酒のない春なんて私には耐えられない  
 節制なんてぞっとする  
 酒サキ姫よ、さあどンドン注いでくれ。  
 おや、リュートと笛の音がする。  
 何だって？ この我々の楽しみに、  
 音楽はなんと言っているんだ？



「一度流れし時，二度と戻らず——  
無為の時，永遠とわに過ぎ去りぬ。

それを呼び戻したいと？ 無駄なこと。  
生命，この有限なる生命は甘きもの  
そして同時にはかなきもの。

何も無いと考えよ。得るものも無しと。  
おだてたところで時は待たず  
けなしたところで速度を早めはしない。

時は若き恋人達をすべて殺した。  
時は無慈悲で冷酷なもの」

酒姫よ，さあもう一度満すのだ。

Carpe Diem とは言うまでもなく Horace に始まる言葉であり，16・17世紀の英詩において好んでうたわれたテーマだ。こうしたラテン文学の影響は単にヨーロッパ文化に現われただけではない。東に及んではまず，3世紀に興り5，6世紀に全盛を迎えたササン朝ペルシャ文化に入ったと考えられる。オリエント文化の一頂点を成すこのササン文化は，ビザンチウムを接点として東ローマ帝国と種々な分野で交流した。主に物質面であるが，ネストリウス教会派が成育し，東西宗教の混合物であるマニ教が誕生したことからも，精神文化そして文字の文化も大いに交流したに違いない。

イラン人による豊かなペルシャ文化は，アラブ人マホメットによるイスラム国家，即ちサラセン帝国の政治的支配下に入った後も，サラセン文化を突らせる原動力となった。こうした文化を背景にして，後に述べる有名な「ルバイヤット」が生み出されたのだ。この後西アジアは蒙古系諸部族の一人ジンギス汗に制覇され，蒙古系トルコ系の国家が乱立する中でチムール帝国，そしてムガル帝国の成立をみるわけである。しかし，ペルシャ文化は，殺伐たる歴史の変遷を経ながらも比較的保護されて綿々と続いた。クジャールの教養知識もこの文化を慈養として見事に開花したのである。

勿論、以上のような東洋が受けた西欧古典文化の影響の存続を全面的に認めたとところで、それがパタン人によって‘Carpe Diem’の如き詩が書かれた理由にはならない。しかし、源流をどこに辿るかはとも角、少なくともその詩的モチーフを受け入れる共通の精神がクシャールにあったことは否めない事実である。この精神はペルシャ文化の人、「ルバイヤット」の原作者オマル・カイヤームにもあった。日本の古来の詩歌をみても、あるいは西欧文化が紹介されてからのものをもみても、Carpe Diem 的韻文が皆無であることを考える時、同じ東洋人といっても日本人と大きく異なる精神的特徴をここに見出すことができる。

もう一つ、ヘレニズ的雰囲気を持った詩を紹介しよう。

美・明白にして現実なるもの<sup>(19)</sup>

老クシャールに白状させてくれ——  
 わたしは二つのものを大切に思っているのだ。  
 自分については己の両眼  
 それ以外では世界中で  
 我が目の見つけた美しさ。  
 蛇のように軽やかでいい香の女の髪が  
 我が心を虜にする、  
 神も等しくわたしには  
 美しい形を啓示する、  
 恍惚感に襲われて  
 五官もしびれ気も失せるほどだ、  
 全き美の前にあっては。  
 認識の力もすべて奪われて  
     形の中にわたしは見る、  
 外見が即ち実体となることを。

近世以降ペルシャで全盛を極めた文化的特徴は<sup>ヌーフイーズム</sup>神秘主義であり、酒・酒壺・

美女・恋人を表面に出しながら、恍惚・神・その唯一性や啓示を意図した。その知識や手法にクジャールも親しんでいたはずであるが、この「美……」の詩から受ける印象はギリシャ、ローマにみられる人間中心主義的物の見方という感じである。イスラムの唯一神以外のもの、しかも己の目やその目に映るこの世の美に価値を置くなどとは、偶像すら認めないイスラム教にとって異端であることは言うまでもない。神も美しい形に従属するかの如きこの詩は、ペルシャのスーフィズムとはその根底において無縁である。ましてや東洋精神の源流の一つ、ヒンディイズムとは全く相入れない精神である。ヒンディイズムにおいては神性を人間の認識知覚を超越したものとし、強いてそれに形状を持たせる場合は、手が四本であったり人獣合体の怪物であったりする。

以上拙訳を紹介しながら種々なことを述べてきたが、これはクジャールの詩がどの文化的伝統を受け継いでいるかを解明するためではない。第一、彼が本当に訳に示されているようなことを考えて書いたとは、和訳の誤りの可能性を抜きにしても、実のところ保証できないのである。東西精神の交流を背景としてクジャールの詩が書かれたことを先に述べたが、今私達の面前に彼の詩を見ることこそ紛れもない東西精神の接触の結果であり、こちらの方により多くの問題が孕まれている。私が彼の詩を重訳したのは、「直訳ではないが、原詩の精神と詩形の調子<sup>(4)</sup>を最大限生かしてあると信じてもらいたい」という英訳者の言葉を信じたからだし、目下のところバシュト語はおろかそれに似たペルシャ語もぜんぜん理解できない私には、疑惑の念が常につきまとう。しかも、それは決して根拠が無いわけではないのである。

クジャールの英訳並びに編集は、Evelyn Howell と Olaf Caroe という二人の英国人の共同による。二人の詳細については現在のところ、詩集の Introduction にあることしか分らない。その筆者であるバシュト語文学教授の Maulana Abdul (ベジャワー大学) は、80代のホウエルに1960年より少し前ケンブリッジ大学で会ったという。ホウエルはバシュト語とその種族バシュトーンについて長年現地で愛情こめた研究を続けた人である。もう一人の訳者カルーは、1947年にパキスタンがイスラム国家として独立建国が成る直前まで

30年間にわたって、ペシャワーにおけるイギリス総督を務めた。パシュトンの歴史・言語・文化に関する優れた書物を著わし、アブダル教授はそれを高く評価している。

さて、ここでパシュト語研究について、Introduction を参考にしながらもう少し説明しよう。パシュト語と英語その他欧州語との学問的関係は19世紀初めに始まる。19世紀後半になるとその関係はさらに緊密になる。即ちイギリスによるアフガニスタン支配が始まるわけである。イギリスは最初に接触をもったヒンドゥ教徒を優遇し、イスラム教徒は商売・学問その他の面で遅れをとった。その状態を打破すべく、西欧文化移植のために大学が設置されたのが1875年だ。以後言語文化面で急速に、西欧人によるインド西北部の研究が進んだ。なかでもパシュ語は彼らを熱中させたい。Introduction のなかには、過去150年間にパシュト語文学その他の研究に貢献した英仏独露人の名が連挙してある。

ところがこの隆盛を極めたパシュトンの研究も19世紀末には下火となる。というよりさして価値のある成果が上がらなくなる。もともとこの研究熱に対して、アブダル教授は全面的な賛同を示しているわけではない。歴史的状況をみれば、その研究が単なる言語・民族・文化の研究以外の意図を孕んでいたことは明白であるし、19世紀末に低滞したというのも、イギリスのインド支配において種々な危機が訪れたからに他ならない。ただクシャールの翻訳を試みたこの二人の英国人は数少ない良心的な研究者の仲間だとして、教授はその功績を称え感謝の意を示している。

教授はペシャワー大学にあるパシュトアカデミーのディレクターでもある。二人の英語韻文訳はパシュト語の詩の美しさとパシュトの詩人の精神を余すところなく伝えている、と述べている。以前別の人が出した同詩の英語散文訳より優れている、とも言っている。要するに現地人であるある教授が、この英訳詩集を認めているのである。

この事実にも拘らず、やはり私は英訳された詩を全面的に信頼する気になれない。逐語訳でなく原作者が狙ったと思われる感情の再現に務めたというから、

なおさら信用することができない。つまり、訳者がどれだけクシャールの emotion と spirit を理解したか信用できないのだ。彼らは原作者の伝記、その歴史的背景および詩形について2、3頁ずつの説明を加え、おのおのの詩にも簡単なコメントをつけているが、彼ら自身が、彼らの立場と生活を土台にしてどのようにクシャールを受け止めたは明らかにしていない。彼らとパシュト語との関わりやの性格を彼ら自身が把握しているのではないならば、クシャールの行動と詩作の性格 (emotion) を彼らが把握して翻訳したとは、とうてい考えることができないではないか。

同じ理由で、私は訳者が果たして適切に詩を選出したかどうかも疑う。現に訳者は、クシャールが幽閉中にその不幸を綿々と綴った物語詩は散文的だから選出しなかったと言う。芸術的に優れ、詩人の特色を最も良く表わしているものだけを選出したと言っているのだが、彼らの価値基準が絶対的なものではないことは、言うまでもないことだろう。実際に二人は「良心的」な訳者かも知れないが、今のところ、私はそれを自分で確かめることができない。ただ英訳詩集を見た限りでは、訳者は西欧中心の概念で原詩を西欧（イギリス）で理解され易い mood に置き換えたにすぎず、各詩のコメントもその域を出ていないように思われるのである。<sup>(15)</sup>

同じような問題を孕んだ英訳文学をもう一つ例に出そう。クシャールの英訳詩集を生んだこのイギリスによるインド植民地支配が、これよりも遙かに有名な翻訳文学をこの世にもたらしたことは、意外に知られていない。というより意に介されていない。それは E. FitzGerald (1809—83) 英訳, Umar Khayyām (1040頃—1123) 原作の「ルバイヤット」だ。オマル・カイヤームについて詳細を述べるつもりはないが、彼はペルシャに生まれた最大の詩人の一人である。ペルシャといってもイラン人ではない。ペルシャ文化の花を咲かせたサラセン帝国の内部から頭角を現わし、11世紀の初めペルシャ全土を占領したセルジュークトルコ帝国の生まれである。建国と時を同じくして生まれ、その勢力拡大充実期を彼はともに生きながら、首都ニーシャプールの天文台で

活躍した科学者である。英訳詩集が出るまで、彼は詩人というより数学者として知られていた。当時のペルシャの詩人達がイスラム教のスーフィズム一色に塗りつぶされていた時、ただ一人、合理主義的悲観論者、唯物主義的無神論者といわれるような四行詩（ルバイ；チャルバイ）を書いた。

人生は砂漠に行く商隊に等しく、人は神の弄ぶ将棋の駒にすぎない、とうたった彼は、ペルシャ文化のなかに生まれた Carpe Diem の詩人であるとも一般に言われている。その深遠な人生哲学は悪魔的であるとさえ思われる。

暗黒の酒の天使の

河岸に汝を見つけて、

飲み干せと盃を勧めて

魂を誘ふことあらば——なためらひそ。<sup>(16)</sup>

（田都隆次訳）

宗教に対する冷笑や痛烈な社会批判は、征服民族のトルコ人として、なおも被征服民族ペルシャ人の宗教と文化に依存している状態を苦々しく思ったせいではないか、と想像することもできる。しかしこうした判断や推測はすべて英訳ルバイヤットを基にしているのである。それはヴィクトリア朝の壮麗な衣裳を着た名文なのである。

「ルバイヤット」はフィッツジェラルドの訳で世界的に有名になった。原詩は平易な用語で簡明に書かれた素朴なものだという。彼はケンブリッジ大学の出であるが、そこに E. B. カウエルという教授がいた。この教授は1856年インドのカルカッタ省立大学でイギリス詩を講じ、1858年には省立サンスクリット学校の校長となり、帰朝後1867年以後ケンブリッジ大学に初設されたサンスクリット講座の教授となった。フィッツジェラルドはこの師の下で学び、1859年に「ルバイヤット」の第一版を出したのだった。<sup>(17)</sup> 1858年にイギリスがインドを完全に併合する前後から、イギリスの東洋研究に物心両面から拍車がかけられていた。＜世界のルバイヤット＞はその産物の一つなのである。フィッツジェラルドは原作の精神・靈性だけを翻訳する名訳者として名高い。だが問

題はクジャールの英訳の場合と同様、どのように原詩の精神を把握したかということである。

日本にも「ルバイヤット」の訳者、愛好家は多い。一、二を除いてすべてフィッツジェラルドからの重訳だ。味わい深い名文訳もある。

酒のまぬおのこは好かぬかな  
 同じ屋根の下に寝<sup>いね</sup>たうもなし  
 同じ方舟に乗り合うもうし  
 ひたすら<sup>おそ</sup>怖る<sup>た</sup>る後の祟りかな<sup>(18)</sup>

ところが私はこの詩に対応する英文を未だに見つけることができない。訳者堀井梁歩の言葉に拠れば、「原文の情緒を十分に汲み取って」作られた詩なのではあるが。フィッツジェラルドの訳も、このような類のものでないと断言することはできないのである。

今さら言うまでもなく、翻訳は多目的な仕事である。が大きく分けてその態度には二種類の性格があると思われる。創作的性格と批評的性格である。＜創作とは＞、を論じるスペースはないが、どちらも原作を生かすために欠くべからざる要素であると同時に、どちらも何かを犠牲にしなければ成立しないものであることを述べておきたい。それは、創作的態度による翻訳は原作者によって書かれた結果としての作品からその基本的仕事が始まるのに対し、批評的態度による翻訳は原作が書かれてしまった以前の時点から出発してそちらの方に比較的重点がおかれるからである。

翻訳によって紹介される部分は極く僅かである。数多くの研究者により手厚い取扱いを受けている幸せな作家は別だが、他国や他民族の人々と極く稀な出会いの機会しか与えられない作家もあろう。特に従来アジア・アフリカ諸国にはそうした作家が多い。これら所謂かっこ付き「後進国」の文学を、「先進国」で紹介したのは主に英語・仏語であり、その功績は確かに否定できないだろう。部分的紹介でしかなくても、ある時代、ある者達にとっては十分な気つ

け薬となり、それ以上彼らは求めようとしなかったかも知れない。

だが今日、言葉や思想の新鮮さと共通性の発見だけで良しとする翻訳者がいたとしたら、その者の翻訳上の態度はおろか生き方自体が問題にされるべきだろう。流動する歴史とその下で動めき言葉を発する詩人の群の存在を思うなら、訳者は訳語の一つ一つが原作者の言葉と一緒に、原作者の生命と原作者の国の伝統とその他もろもろの状況とを担っていることを意識するはずである。

歴史の偶然から、英語を母国語とする者はこれまでに種々な文学に触れる機会を持ち、しかも大変有利な立場から研究を進め、その成果をたくさん残してくれた。将来も私達が英語を通して英米以外の外国文学に触れることは多いだろう。英語は英米文学（文化）を知るためにあるだけではない。英語が媒体となって異国の文学が作家達の活動の慈養となり、かつ読者は新たな詩人の存在を知ることができる。例え翻訳が原作を換骨奪胎したものであっても、文学的創造の運動にそれなりの貢献はするのである。

しかし従来の貢献の仕方は、英文学研究の半ば副産物的なものではなかつただろうか。しかも、先にも述べたように、英語という言語および英語を用いる人間自体に固有の国民的文化的特殊性（即ち限界性）があるにも拘らず、翻訳紹介に際してその面からの反省があったようにも見うけられない。今日文学の存在そのものの危機が叫ばれながら、それでいて未だ開拓されざる文学がイラン・アラブ文化圏をはじめ後進諸地域にたくさん埋もれたままになっている現状である。国際語ともなった英語および英語文化の欠陥を再検討すると同時に、それをもっと積極的に利用してゆくことの必要性が考えられるのである。

原語を理解できず、英訳を通して私がクシャールやオマル・カイヤームを知ったことを、彼らがどれだけ喜ぶか疑わしい。喜んでもらおうなどという不遜な考えは持たないが、歴史の一時期に投じられた彼らの運命に、現代ここに生きる私の生命を対応させて、彼らが摺んだ創造の動機を私自身のなかに熱くさせたいとは思っている。それも、異国の作家を知るうえで、媒体の不完全性を補う一手段ではないだろうか



## 註

## (1) Bubbles

Many a man whom I have known  
 Like a breath of wind is passed and gone.  
 More are passing even now—  
 Bubbles, Khushhal, such art thou.  
 The Great Artificer no doubt  
 Knows full well what he's about  
 Blowing bubbles; bubbles blown  
 Are no sooner blown than flown,  
 Scarcely sooner flown than ended;  
 Bubbles burst when they're distended,  
 And can never more be mended.  
 But ere ended how they dance,  
 Lacking substance, lacking stance,  
 Up or down as they may chance,  
 On the gales of circumstance.  
 Sadness, gladness, joy and sorrow  
 Interchangeable tomorrow.  
 Know thyself? Absurd direction!  
 Bubbles bear no introspection.

*The Poems of Khushhal Khan Khatak* with English Verse translations by Evelyn Howll and Olaf Caroe (Oxford, 1963), p. 59.

## (2) Kismet

What doth profit man his striving  
 What availeth his contriving?  
 Fate will use him as it will.  
 Be mankind arrayed against thee,  
 All the world one blade against thee,  
 Pointed, imminent to kill,  
 Bullet, arrow, swordsman, spearman,  
 Nothing heed them, never fear, man,  
 All are powerless until  
 Doom descends. A plundering rover

How the honey bee doth hover  
 O'er the rose to snatch her fill.

Fate like her, Khushhal, is winging,  
 Up and set the world a-ringing  
 With thy bravery and skill.

Would'st thou live in song and story?  
 Youth's the time for deeds of glory,  
 Youth is ardent, age is chill.

All thy sires the spear have shaken,  
 All thy sires the sword hath taken,  
 Follow them and fear no ill. (p. 57)

(3) Aurang—A Hymn of Hate

Aurang, full well I know him. So just is he, so fair  
 Precise in all observances, punctilious in prayer.  
 But he slew his own blood brothers in fratricidal strife,  
 Gave battle to his father and imprisoned him for life.  
 The devotee a thousand times may blow to earth incline  
 Or by repeated fasts may bring his navel to his spine,  
 But if his act mate not with speach to further good intent,  
 His posturings are profitless, his fastings fraudulent.  
 The outward of the snake is fair and glossy is her skin,  
 But venom lurks behind her lips and treachery within.  
 The valiant speaks but little; by deeds his praise is sung:  
 The coward and the braggart make sword-play with their tongue.  
 My words reveal, to him who reads, a portrait of Aurang.  
 My hand can never reach him, but hear me, Lord, I play!  
 To Aurang, Lord, be merciless on Thy Great Judgement Day! (p. 47)

- (4) A king unkingly, faithless, false, forsworn, 49  
 His truth is lies, his honesty a scorn.  
 'Twixt him and us fair compact is there none,  
 If Mogul stand, then we are spent and done. 52  
 ('Spring Thought' p. 51)

- (5) But we must march and still united stand. 58  
 Mohmands, Shinwaris, proud Afridi Clan,

Now is the time, now—'Up, and play the Man.  
The sword alone can give deliverance,  
The sword wherein is our predominance. 62  
(*'Spring Thought,' p. 53*)

- (6) I call to battle, but who heeds my calls? 66  
And I grow weary calling to the fray,  
If none will harken nor my call obey,  
Then welcome death, come speedily, sweet death,  
Life without honour is but waste of breath,  
In life and death be honour still my guide,  
So shall the memory of Khushhal abide. 72  
(*'Spring Thoughts, p. 53*)

- (7) Ah God! grant honour, concord, grand refrain,  
And old Khushhal will rise, a youth again! v. 3 (=couplet 3)  
(*'Concord,' p. 55*)

- (8) バタン族が戦闘的であることは歴史書のなかでも有名であるが、バタン族が伝承している作者不詳の歌謡の二行詞 Lundaye のなかにもそれを証明する詞が多い。例えば、「剣を振らずして何をなさろうというのか、アフガンの母の乳を吸ったあなたよ」というのが、女から男への代表的な言葉なのである。

- (9) 'Lord, hearken to my plea—mine eyes Thou gavest me,  
Wherefore? But for to see,  
Didst Thou not?  
The priest may fast and pray—that has never been my way,  
for me another way,  
Is there not?  
For me another rule—the cup of life is full,  
I will take a good long pull,  
May I not?  
(*'Is it not?,' couplet 4-6, p. 29*)

- (10) I exalt thee in the congregation and squire no merit in mine own  
heart and it profiteth me nothing: yea, my strength availeth not to  
offer thee due praise.

Lord, deliver me from blood-guiltiness: even now I am upon the

sword to bring the innocent to the grave.

Verily, my lust maketh evil that which is good, and good evil: as for me, I am always helpless before the bidding.

My soul delighteth in every unbelief, even threescore and twelve: yet am I numbered with the faithful in the outward parts.

Lord I am plunged in the ocean of desire: in the fortress of lust am I encompassed.

Verily, if to use vain repetitions is to be a Muslim, well for me: I am numbered in the company of true believers!

I have no strength to bear thy punishments, O God: pour upon me thy mercy; I wait at thy threshold!

Though I am full of sin and vainglorious: yet am I Khushhal, servant of the Almighty!

(‘A Psalm,’ couplet 9-16, p. 71)

- (11) Mine own familiar friend knoweth not the evil I have done in thy sight: I, even I only among men, have my sins ever before me.

(‘A Psalm,’ couplet 5, p. 71)

- (12) Carpe Diem

Roses, wine—a frined to share!

Spring sans wine I will not bear,

Abstinence I do abhor.

Cup on cup, my Saqi, pour.

Hark, the lute and pipe. Give ear.

What says music to our cheer?

‘Time once flown returneth never—

Idle moments, gone for ever.

Would’st recall them? Call in vain.

Life, our mortal life, hath sweetness,

As its sweetness, so its fleetness.

Count it nothing. ‘Tis no gain.

Doth time tarry for thy prizing

Or make speed for thy despising?

Time hath all young lovers slain.

Time is heedless, time is heartless.’  
 Saqi, fill and fill again. (p. 61)

(13) Beauty, Apparent and Real

Let old Khushhal confess—  
 Two things I prize  
 In me mine eyes  
 In all the world beside,  
 Where they have loveliness espied,  
 I prize that loveliness.  
 Snake-swift a scented tress  
 Doth all my veins possess,  
 Divinity, no less,  
 For me fair forms reveal,  
 Such ecstasy I feel,  
 I swoon, my senses reel  
 Before all loveliness.  
 All Sense transcended in the Form I see  
 Semblance that merges in Reality. (p. 27)

- (14) バジユトのブロンディはアラビアの詩形を真似ており、カプレットに相当する verse (bayt) が一つの単位を成している。例外を除き最初の bayt だけ脚韻をふみ、その韻は一行間隔で詩の最後まで現われる。この効果は英訳においてはリフレインなどによって表わされている。スキヤンに関しては、訳者は長さよりも強弱に拠るとしているが、Introduction の筆者はそれに反対している。その他詳細は pp. 77-82.

- (15) 例えば ‘Carpe Diem’ のなかに “lute” という言葉が出てくる。これはサリンダと呼ばれる鼓弓に似た4弦の擦弦民族楽器のことである。リュートは14-17世紀にヨーロッパで使用された撥弦楽器だ。音曲は偶像とともにイスラム教ではご法度であるし、勿論酒も許されない。こうした背景の考察なしに ‘Carpe Diem’ という西洋詩の伝統的題名を付けることは大変危険だと思われる。

- (16) So when the Angel of the darker Drink  
 At last shall find you by the river-brink,  
 And, offering his Cup, invite your Soul  
 Forth to your Lips to quaff—you shall not shrink

「小泉八雲全集 第15巻」(東京第一書房, 昭和5年) p. 518.

- (17) 以上の経過については、竹友藻風訳「ルバイヤット」（京都西村書店，昭和22年）のなかの訳者による〈解題〉の項を参照した。
- (18) 堀井梁歩訳「ルバイヤット（異本留盃耶土）」（南北書園，昭和22年）p. 3.